

統一新羅の仏教と天一国の統一思想

鮮文大学校
教授 柳在坤

I 序論

7世紀から8世紀にかけては、東アジアで仏教が最も栄えた時代である。唐では竜門の奉先寺大仏が造られ、国々には開元寺という国立寺院もつくられた。新しくインドから帰朝した玄奘三蔵は新しい唯識仏教の経典を翻訳し、法相宗を生んだし、『華嚴経』に基づく華嚴宗が都の長安、洛陽を中心として栄えた。

一方、韓半島では、三国分立の時代が終わりを告げ、新しい統一国家としての新羅が生まれ（668）、韓半島にも統一の時代が幕開けした。統一の時代には、それにふさわしい文化や精神的エネルギーが必要とされる。その精神的支柱としての華嚴宗のイデオロギーを中国から新羅にもたらしたのが義湘であった。

華嚴の思想というものは実に壮大で複雑なものである。国家統一、社会安定、人心平安をめざす時代には、堂々たる華嚴の体系はまことにふさわしい。

インドで個人の心の安定を求めて出発した仏陀の教えは、やがて中国、韓国を経て国家鎮護のどっしりとした思想となって日本列島にも伝わった。東大寺がその象徴ですが、やがて国家を超えた宇宙全体の調和をめざす教えとして成熟していった。

統一新羅における仏教と天一国における統一思想の役割について比較検討するのが本稿である。

II 三国の仏教伝来と隆盛

1. 高句麗の仏教伝来と隆盛

高句麗の仏教伝来は、小獸林王2年（372）に前秦の王の苻堅が送った順道によって始められた。つづいて同王4年に阿道が入国したし、肖門寺と伊佛蘭寺が建造されて奨励し始めた。これはどこまでも前秦の王と高句麗の王の間になされた公的な伝来であり、いわゆる朝貢という定石のトンネルを通してなされた伝播であった。このような事実は、仏教が古代国家の思想的な支柱として、または精神的な理念として、王室ないしは国家の必要性から受け入れられたものであることを教えている。

小獸林王以後、歴代王の仏教の保護と奨めは当時の古代国家発展過程にしたがって三論宗を中心に大きく反映・隆盛するようになった。特に故国壤王は令をもって仏教を奨

励したし、仏教が持つ護国観・現実性によって広開土王及び長壽王の時に大きく発展し、国民上下の統一感と融合が促進された。したがって僧侶は国家的に優待され、多くの名僧が排出されたので、義淵は陳に行って仏法を研究したし、慧灌は日本に行って三論宗を開いたし、曇徴は日本に渡って法隆寺の金堂壁画を描いた。

2. 百済の仏教伝来と隆盛

百済は枕流王の元年（384）に東晋から摩羅難陀によって伝えられたし、漢山に寺刹が建造され、国家的に奨励された。やはり国家的な必要性から受け入れられたのであり、南朝と関係が深い百済としてはそこから僧侶を迎え入れ、その布教に努力するようになった。

枕流王以後、大きく発展した仏教は、聖王の時に大きく栄え、この時、怒唎斯致契によって日本に伝授された。謙益は印度まで通って律宗を発展させたし、惠聰は高句麗の惠慈とともに日本に渡り、聖徳太子の師になった。このような仏教を中心にした百済文化の日本伝播はまさに飛鳥文化の核心として日本古典文化の基礎になった。

3. 新羅の仏教伝来と隆盛

新羅は社会的な後進性においてと同じように、仏教の伝来においても最も遅れたので、5世紀の訥祇王の時、高句麗の墨胡子（一名 阿道）によって伝えられた。彼は高句麗・百済の場合と違って個人的に入国し、慶尚道の一善郡の毛禮の家で布教を始めたが、強靱な原始信仰と排他性から拒否された。しかし、6世紀に至り、梁の使節である元表によって王室に仏教が伝来され、次第に民間に浸透されたが、貴族らの反対にぶつかって、大きな試練を経ざるをえなかった。しかし、異次頓の殉教によって頑強な貴族らの反対をものともせず、法興王 14 年（527）に公認され、興輪寺が建造されて仏教は王室の庇護のもとに発展した。

長い間の試練と反発を経験した新羅は次第に国家の発展とともに仏教も隆盛の道を歩むようになった。

特に真興王の時には皇龍寺を、善徳王の時には芬皇寺を建造し、国家的な奨励と興盛の姿を見せている。このような護国的な崇佛策は国家太平の祈願のための百座講会を準備するようになったし、高僧の大徳を僧統として優待するようになったこともわかる。

圓光は乞師表を作って隋にささげたし、世俗五戒（事君以忠、事親以孝、交友以信、臨戦無退、殺生有擇）をつくって国民協同と犠牲精神を呼び起こした。

慈藏は皇龍寺 9 層の石塔の建造を建議し、戒律宗を開いた。

高句麗の帰化僧である普徳は涅槃宗を開いて新羅仏教を発展させた。

圓測は、唐に入って仏教を研究したのちに玄奘門下で仏教經典の翻訳事業を起こして

新羅仏教の繁栄を海外で確認した。

このような仏教の護国観は法興王以来で、仏教王名を用いるようになったし、法興王が哀公寺に埋葬の地を定めた以降、真興王も哀公寺、武烈王は永敬寺など、歴代王は寺刹に埋葬の地を選んだし、文武王の大王巖でも仏教的であり、護国的な面を伺うことができる。

4. 仏教伝来の影響

仏教が残した影響は即ち、韓国仏教の性格を意味するものであり、韓国社会が要求する現実的な必要性の表現でもあった。

仏教が残した影響の第一は、仏教が古代国家の思想的な理念になったという点である。

仏教は原始的な多神教やシャーマニズムなどの一切の信仰を超越する古代国家の精神的な背景として導入され、王権の強化と神聖であることに決定的な役割を果たしたし、三国の王室が仏教の受容に先導的な役割を果たすこともこのためである。さらに国民思想の統一は言うまでもなく、意識と思惟の開発に大きな役割を果たした。

第二は、仏教は護国的な思想になった点である。

王室・貴族の中心のまた、上からの伝来と奨励は自然に仏教の護国観と結合するようになったし、寺刹の名称が佛国・興国・興王・王輪などにつけられたのも仏教が国家・民族守護の精神的なもとになったからである。それは百座講会のような仏教行事は護国信仰の表示であったと考えられる。

第三は、仏教は現実・求福信仰の性格を帯びた。

第四は、仏教は芸術と学問の発展に決定的な役割を果たした。

IV 新羅の三国統一の過程

後進国であった新羅が強大国である高句麗と百済を滅亡させ三国を統一したという事実は大きな歴史的な事件であると言える。

新羅が三国統一した社会的な基盤として、長い間先進文物を受け取ることができない後進社会にとどまっていたので、社会的安定をもたらし、氏族的紐帯の強化とスムーズな国力の蓄積を可能にし、強力な国民的な団結の推進力になりえた。

とりわけ6世紀中葉、真興王の時になって飛躍的な発展を遂げた。

- 1) 伽耶連盟の最後の中心勢力であった大伽耶を合併した。
- 2) 漢江流域を占領した。高句麗・百済の間を遮断し、対中国交渉の喚問を供えた。また漢江流域の人的・物的資源を占めて強力な国家として台頭できた。
- 3) 咸興地方まで進出し三国統一の経済的・領土的な基盤を供えた。

真興王の時、國民的団結と共同心を培うために国家的発展の基盤となった花郎徒を公認し、官昌・金 信らの名将勇卒を輩出し、偉大な指導者を生んだ。特にその精神から犠牲・愛国・協同を通じた国家意識を育て三国統一の精神的な原動力になった。当時の花郎徒の世俗五戒は花郎だけの実践道徳だけでなく、全国民の思想的な武器として透徹した国家観を呼び起こすようになった国民総和の倫理であった。

この時、百済は義慈王の失政が露呈し、政治的・経済的な混乱と分裂が激しくなり、内紛と民心の離脱が深まって民族的な団結をなせない状況であった。

また、高句麗も淵蓋蘇文の独裁と彼の子弟間の内紛は国民の総和を激しく害していた。

このように百済・高句麗が内紛にあえいでいたので、新羅の金春秋は積極的な親唐策をとり、唐と軍事同盟を締結した。

新羅・唐連合軍による三国統一の第一段階は、百済の滅亡（660）第二段階は、高句麗の滅亡（668）であった。そして第3段階は、唐軍が韓半島全体の侵略の野欲を見せたが、新羅が軍・官・民の協力の下に唐軍を韓半島から追い出して三国統一を成し遂げた。（676）

三国統一の歴史的意義は、

第1に、三国統一は最初の民族統一の実現であった。

第2に、三国統一は民族文化の伝統は継承し、より高い文化段階に飛躍する契機になった。

特に新羅は自らの伝統文化に百済・高句麗・唐のものを吸収し、燦爛たる民族文化の精髓を築くようになったというところにその真の意味がある。

第3に、三国統一は民族の自主性を確立したという点である。

V 統一新羅の仏教の性格

仏教は古代国家の思想的理念として王権の強化と王室の権威のための道具として受容されたので、自然に国家と皇室の強力な保護と奨めを受けるようになった。

第一に、仏教は護国信仰として国家を保護し、君主と貴族のために存在すると考えられた。このため、国家の絶対的な奨めによって多くの寺刹が建造された。

第二に、仏教は現実宗教として現実生活に福をもたらし、現実の困難を解決してくれる信仰として注目視された。したがって、元曉の浄土教は民衆仏教として大衆化に画期的な役割を果たした。

第三に、仏教は芸術発展の功労者として塔婆・工芸・美術・彫刻などの発達に決定的な役割を果たした。

1. 統一新羅の仏教の宗派

1) 教宗 (5 教) — 仏教と口論によって仏陀が真理を求める王室・貴族中心の宗派であり、これはどこまでも深奥な仏経を体得することによって成仏できるものであるという。

(1) 普徳の涅槃宗 (高句麗からの帰化僧)

(2) 慈蔵の戒律宗

(3) 義湘の華嚴宗 — 円満具足で仏法の平等を強調した宗派

(4) 元曉の法性宗 — 宗派の対立を統一融合することによって仏教の調和に力点を置いた宗派

(5) 真表の法相宗

2) 禪宗 (9 山)

2. 仏教が残した影響

第一に、仏教は思想を統一するのに最も大きな貢献をしたし、さらに護国信仰として古代国家の理念的な背景になったし、王権の強化にも大きく寄与した。したがって王室が常に先だって受け容れられた、積極的に勧めた。

第二に、仏教は韓国の学問の発達に寄与した。

第三に、仏教は芸術の発展に大きな功労を残したし、仏像・塔婆・彫刻の内容は即ちそのものの芸術であった。

第四に、仏教は過ぎた国家の保護と奨励に力を得て國統制度のような僧職がつくられ、政治参加の道を開くようになった。

VI 統一新羅時代の仏教著述一覧

元曉：(現存する) 法華經宗要、大慧度經宗要、涅槃經宗要、無量壽經宗要、弥勒上生經宗要、阿弥陀經疏、金剛三昧經論、瓔珞本業經疏、菩薩戒本持犯要記、梵網經菩薩戒本私記、大乘起信論疏、大乘起信論別記、中邊分別論疏、二障義、遊心安樂道、大乘六情懺悔法、發心修行章、判比論量

(断片が現存する) 華嚴經疏、十門和諍論、解深蜜經疏

般若心經疏、法華經方便品料簡、法華要略、華嚴綱目、華嚴經宗要、大乘觀行、華嚴一道章、勝鬘經疏、無量壽經私記、涅槃經疏、般舟三昧經疏、維摩經疏、金光明經疏、楞伽經宗要、不增不減經疏、梵網經宗要、四分律羯磨疏、金剛般若波羅蜜多經疏、俱舍論疏、金光明經義記、中觀論宗要、三論宗要、掌珍論宗要、瑜伽論中実、成唯識論宗要、

撰大乘論疏、阿毘達磨雜集論疏、寶性論宗要、因明入正理論記、大乘起信論私記、二諦章、安心事心論、清弁護法空有諍論、成實論疏、四分律行宗記、究竟一乘寶性論科文、成唯識論疏

圓測：(現存する) 解深蜜經疏、仁王般若經疏、般若波羅蜜多心經贊

金剛般若經疏、成唯識論疏、成唯識論別章、唯識二十論疏、六十二見章、百法論疏、觀所緣論疏、因明論疏、因明正理門論疏、彌勒上生經略贊、無量壽經疏、阿彌陀經疏、俱舍論釋頌抄、瑜伽論疏

道詮：成唯識論要集、撰大乘論世親釋論疏、般若理趣分經疏、金剛般若經疏、西方極樂要讚、辨中邊論疏、因明入正理門論疏、聖教略述章、天台智者大師別傳、成唯識論綱要

勝莊：(現存) 梵網經述記

成唯識論注樞要、成唯識論決、阿毘達磨雜集論疏、佛性論義、因明正理門論述記、起信論問答、最勝王經疏

道倫：(現存) 瑜伽師地論記

金剛般若經略記、成唯識論要決、新撰大乘義章、法華經疏、金剛三昧經注、勝鬘經疏、阿彌陀經疏、藥師經疏、維摩經料簡、金光明經略記、淨飯王經疏、十一面經疏、四分律決問

神昉：(現存) 大乘大集地藏十輪經序

成唯識論要集、成唯識論記、順正理論述文記序、顯識論記、種性差別集、阿彌陀經疏

順璟：成唯識論料簡、法華經料簡、毘婆沙心論抄、因明入正理論抄

慧景：瑜伽論疏、瑜伽論文述、撰大乘論義章、四分律比丘作釋戒本疏

行達：瑜伽論料簡、唯識樞要記

懷輿：(現存) 無量壽經連義述文贊、金光明經略贊、彌勒上生經疏、彌勒下生成仏經疏

金剛般若經料簡、法華經疏、觀無量壽經疏、涅槃經宗述贊、涅槃經疏、大集經疏、藥師經疏、無垢稱經疏、金光明最勝王經述贊、解深蜜經疏、十二門陀羅尼經疏、四分律羯磨記、四分律拾毘尼要、俱舍論鈔、瑜伽論疏、成唯識論貶量、成唯識論樞要記、顯揚論疏、顯唯識記、因明論義抄、大乘起信論問答、法苑義林記

淨達：大毘婆沙論疏

義寂：(現存) 梵網經菩薩戒本疏、法華經論述記

菩薩瓔珞本業經疏、法華經綱目、大般若經綱要、般若理趣分經幽贊、金剛般若經贊、華嚴經綱目、無量壽經述義記、觀無量壽經綱要、涅槃經疏、涅槃經綱目、涅槃經云何偈、彌勒上生經料簡、成唯識論未詳決、百法論總述、馬鳴生論疏、大乘義林廣章、瑜伽論義、梵網經文記

觀智：涅槃經料簡、阿毘達磨識身足論疏

端目：梵網經記

太賢：(現存) 藥師本願經古迹記、成唯識論學記、大乘起信論內義略探記、
梵網古迹記、梵網菩薩戒本宗要
般若理趣分經注、金剛般若經古迹記、仁王般若經古迹記、法華經古迹記、
華嚴經古迹記、無量壽經古迹記、稱讚淨土經古迹記、涅槃經古迹記、
彌勒上生經古迹記、彌勒下生經古迹記、金光明經述記、佛地論古迹記、
廣百論古迹記、掌珍論古迹記、瑜伽論古迹記、成唯識論古迹記、唯識二十論古迹記、撰
大乘論世親釋論古迹記、辨中弁論古迹記、瑜伽論纂要、阿毘達磨雜集論古迹記、五蘊論
古迹記、百法論古迹記、觀所緣論古迹記、因明入正理論古迹記、法苑義林大乘心路章、
法苑義林釋名章、大乘一味章、成唯識論古迹記

義湘：(現存) 華嚴一乘法界圖、白花道場發願文
入法界品鈔記、華嚴十門看法觀、阿彌陀經義記

道身：華嚴一乘問答

智通：華嚴要義問答

表員：(現存) 華嚴經文義要決

緣起：華嚴真流還源樂圖、華嚴經要訣、華嚴開宗決疑、大乘起信論珠網、
大乘起信論捨繁取抄

明島：(現存) 海印三昧論

見登：(現存) 華嚴一乘成佛妙義、大乘起信論同意略集

宗一：華嚴經疏、華嚴經料簡

梵如：華嚴經要訣

珍嵩：(現存) 一乘法界圖記、
華嚴孔目記

可歸：華嚴經義綱、心源章

大衍：大乘義章、起信論疏、大方等如來藏經疏

義融：華嚴經釋名章

月忠：釋摩訶衍論疏

玄隆：唯識章

大悲：金剛般若經疏

神廓：撰大乘論章、撰大乘論無性釋論疏、觀所緣論疏

玄範：解深蜜經疏、撰大乘論疏、辨中邊論疏、對法論疏、入正理門疏、大涅槃經鈔、無垢稱經
疏、能斷金剛般若經述贊、仁王般若經疏、法華經疏、成唯識論疏

靈因：解深蜜經疏、俱舍論抄、無量壽經疏

智仁：十一面經疏、四分律六卷本抄記、佛地論疏、顯揚論疏、阿毘達磨雜集
論疏

玄一：(現存) 無量壽經記

観無量寿経記、隋願往生経記、法華経疏、大涅槃経料簡、梵網経疏、
瑜伽論疏、唯識論私記、中邊論料簡

法位：無量寿経疏

慧超：(現存) 大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王経序、往五天竺國傳

不可思議：大毘盧遮那経供養次第法疏

多くの新羅の僧侶が中国やインドに行って仏教を研究してきたし、またたとえ中国やインドに留学しなくとも仏教に対する多くの研究を行い、国内外の仏教界に大きな影響を及ぼしたのである。

上記の一覧表を見れば、いかに多くの学僧たちが多くの著述をしたのかと驚くべき思いを禁ずることができない。韓国の仏教史上に後にも先にもないことであると言っても言い過ぎではない。さらに、彼らがいかに多くの仏教の經典に対して関心を表明したこともわかる。彼らの著述は内容が豊富だけでなく、理解の水準がまた高かったのである。それゆえに、統一新羅の仏教は、中国及び日本に教理上多くの影響を及ぼすようになったのである。

ところが問題点は、仏教の教理に対する研究は一方で教理の対立をもたらしたし、またこれにとまなう教派の分立の現象を顕わにした。

VII 義湘の華嚴思想と元曉の和諍思想

このような中で統一新羅の仏教界に大きな影響力を発揮したのが義湘の華嚴思想と元曉の和諍思想であった。義湘の華嚴思想は支配層中心の統和思想であった。これに対して、元曉の和諍思想は一般民衆を中心にした和合思想であった。

1. 義湘の華嚴思想

義湘は朝鮮華嚴の基礎を開いた人であり、朝鮮仏教思想に重要な役割を果たした。彼は中国の華嚴宗の第二祖、智儼の弟子であり、華嚴宗を大成した法蔵（643－712）とは兄弟弟子の関係にあった。

義湘の俗姓は金氏、韓信の子である。20歳で出家した。650年、元曉とともに高句麗經由で入唐を志したが、途中、難にあったため帰国を余儀なくされた。この時入唐できなかったのは、遼東のあたりで牒者と疑われ、数旬の間、幽閉されたためであった。

次に669年、元曉とともに出発し、元曉はその途中において土龕（墓穴のこと）に宿泊した時、万法唯心の道理を悟ったため帰国したが、義湘は入唐の志を変えることがなかった。

671年、帰国した義湘は勅命により太白山の浮石寺を創建した。さらに原州の毘摩羅寺、伽耶山の海印寺、毗瑟山の玉泉寺、南嶽の華嚴寺、金井山の梵魚寺などいわゆる華嚴十刹を建立した。義湘の弟子には、十大弟子と言われる悟真・智通・表訓・真定・真藏・道融・良円・相源・能仁・義寂をはじめとして三千門徒がいたとされる。

義湘の教学は、唐の法蔵の華嚴経が苦の核心に大きな影響を与えている。例えば、宝蔵の『華嚴五教抄』の中の法界縁起を説く部分が、義湘の著書である『華嚴一乘法界図』の思想の影響によってできたものである。義湘の華嚴額を宝蔵のそれと比較すると、理論よりも実践を重んじたものであって、それは韓国華嚴の伝統となった。

著書としては『華嚴十門看法観』『華嚴一乘法界図』『入法界品鈔記』『阿弥陀経義記』の4種があり、4種のうち最も重要なのは『華嚴一乘法界図』である。義湘が師の智儼から学んで理解した華嚴教学の宗要が述べられている。

唐の法蔵の華嚴教学の核心に、義湘の教学は大きな影響を与えている。

そのほか新羅の華嚴学者には、『華嚴一乗成仏妙義』『大乘起信論同異略集』などを著した青丘沙門見登、および『海印三昧論』を著した明島、『華嚴経文義要決問答』を著した表員がいる。

義湘は新羅の華嚴思想を代表する人物である。彼の華嚴思想をよく表しているのは『華嚴一乘法界図』であるが、この中で彼は、

一の中に一切であり多の中に一であり、	(一中一切多中一)
一がすなわち一切であり多がすなわち一である。	(一即一切多即一)
一つの小さな塵の中に十方を含み、	(一微塵中含十方)
一切の塵の中にまたこれと同じである。	(一切塵中亦如是)
無量な遠い劫(永遠)がすなわち一つの刹那であり、	(無量遠劫即一念)
一つの刹那がすなわちそのまま無量な劫である。	(一念即是無量劫)

一つがすなわち一切であり、一つの小さな塵の中に十方があるのであり、一つの刹那がすなわち永遠であるという。一心によって宇宙の万象を統撰しようとするものと理解される。

宇宙の多様な現象が結局は一つであるという『華嚴一乘法界図』の精神は、専制王権を中心とした中央集権的な統治体制を支えることに適合する。

統一新羅の支配層から華嚴思想が歓迎されるわけは、義湘の俗姓が金氏であり、王族である真骨貴族と言われる出身身分だけでなく、このようなどころから求めることができる。

2 元暁の和諍思想

元暁(618~686)は、真平王39年(618)、新羅の押梁郡の仏地村で6頭品の家門

に生まれた。姓は薛氏、父は談捺乃末（奈麻）であり、幼名は誓幢といった。生まれながら穎異であり、師につかずに仏法を学んだ。また花郎の徒に類するような奇驕の行動もあり、瑤石宮の寡公主と婚を通じ、薛聡をもうけた。彼は天性明敏で知恵があり、吏読で九經を解説し、学生を教育して学者たちの宗主として崇められたという。

彼は三国統一前後に活躍した名僧として韓国の仏教哲学を体系化させた人である。

元曉は、破戒してから俗服を着て、自ら小姓居士と名のつた。芝居の役者が用いる大瓢で遊び道具を作り、それを「無碍」と名付け、これをもって多くの村々を歩き、歌ったり舞ったりして民衆を教化した。彼の偉大な教化力によって民衆の中に仏教が浸透することができたのである。彼の生れた村の名は「仏地」であり、寺名は初開寺である。

元曉は義湘とともに唐へ遊学の途に就いたのであったが、途中でその志を翻して入唐を放棄した。この時の事情は次のような説話として伝えられている。

二人は入唐求法の旅に出、ある夜、東の間で野宿したとき渴きを覚えて水を飲んだ。ところが翌朝、それは罽囊の中に入っていた水であったことがわかり、急に吐き気をもよおした。そこで夜、なんとも思わなければ飲めた水も、ひとたび罽囊の水とわかるとこれを飲むことができないのは、一切のものが心によって生ずるためである、と悟ったという。

唯心所造の道理を悟った元曉は、国内に留まって一切の經論を研究し、ついに中国の教学者にも負けない偉大な仏教学者、独創的な思想家になった。入唐の放棄こそ、彼を不朽の仏教者にならしめたのであった。

彼の仏教観は、第一に、仏教の様々な宗派の対立を止揚し、相互調和・統一・融合を主張した。その宗旨の根本は融会（和会）の思想である。

すなわち、仏家の典籍がそれぞれ相違した流れをもっているが、究極には公平・無私な一つに通じることが出来るのである。これは「非有非無 遠離二編 不著中道」というように、「不有の法が無でもなく不有の相が有でもない」、否定でも肯定でもない和諍の哲学である。

元曉が様々な經典に注釈したのは、全仏教を和解・総合するためであった。たとえば、

『大慧度經宗要』では、実相と無相

『涅槃經宗要』では、涅槃の体と用

『金剛三昧經論』では、一切衆生同一本覺

『起信論疏』では、一心の本源

『起信論別記』では、真俗平等を説いている。

『十門和諍論』はまさにこのような和諍思想を端的に見せる彼の核心的な著述である。彼は様々な異説を十門に集めて整理し、会通することによって一乗仏教の建設のための論理的な根拠を提示した。彼のこのような通仏教的な帰一思想は韓国仏教に大きな影響

を及ぼした。

和諍の論理は次のように展開される。“諍論は執着から生じる。ある異見の論争が生じたとき、たとえ有見は空見と異なり、空執は有執と異なると主張する時、論戦はさらに深くなる。だからと言ってこれらを同じであるとすれば、自己の中で互いに諍うだろう。それゆえに異でもなく同でもないと説く。”また、“仏道は広蕩し、無導無方する。それゆえに該当しないことがなく、一切の他義がすべての仏義である。百家の説が正しくないことがなく八万法門がすべて理知にかなうのである。ところが見聞が少ない人は狭い所見によって自己の見解に賛同するものは正しく、見解を異にするものは正しくないというので、これは葦の穴から天を見た人がその葦の穴から天を見ない人たちを見て皆が天を見ることができない者であることと同じである。”と言った。元曉はこのように徹底した論理の根拠をもって和諍を主張した。

彼の和諍思想の出現は新羅のすべての仏教思想がいったん元曉当時に整理されたことを意味する。それは新羅仏教を新しい次元に進むようにした。

元曉は、いかなる経論に偏らず多くの経論をまとめて研究した。その結果、『華嚴経』・『般若経』・『法華経』・『涅槃経』・『金剛三昧経』・『大乘起信論』・『無量寿経』・『弥勒上生経』・『阿弥陀経』・『勝鬘経』・『維摩経』・『金光明経』など多くの経論に注疏をつけている。

このような元曉の仏教思想は新羅仏教がすべての經典を理解できる段階に至ったことを示唆する。あるいは統一新羅以降、新羅の仏教思想の発展基盤が元曉思想において備えられたと見なければならぬ。

しかし、元曉はある一つの経や論をもって經典とみなさず、様々な経論が矛盾対立するように見える点を融和統一させようとした。まさにこの点に彼の特徴があるのである。

ところで、元曉はこの和諍をすべての人間が平等であるという基本的な原則の上で主張している。

元曉の基本的な立場は、聖人だけでなく悪人も成仏できるというものである。これは支配者を中心とした和合の思想でなく、民衆を中心とした和合の思想であった。平等の土台の上に思想的融合を試みたのが元曉であったとしてもよいであろう。

第二に、彼の代表的な大乘起信論疏に表われているように、覚の哲学が彼の大きな思想的な特徴である。一心思想ともいう。

覚には本覚と始覚があるが、両者はそれぞれ先驗・後驗のものと把握するが、両者の相関関係で覚を解いている。しかし覚は根本的に心の姿勢にあるが、止と観を通じた実践的な姿勢（心）から求めようとする心に帰着するといった。

元曉の一心思想は、彼の著書『金剛三昧経論』・『大乘起信論疏』など彼のすべての著述で徹底して闡明にしている。人間の心識を深く洞察して本覚に入っていくこと、すなわち帰一心源を究極の目標と設定し、六波羅蜜の実践を強調している。

彼は万法帰一・万行帰真を固く信じ、思想と生活を導いていった。そして一心こそ万物の主枢であり、一心の世界を仏国土、極楽と見たし、これを大乘・仏性・涅槃であると呼んだ。

第三に、元暁の仏教観は衆生救済と仏教の大衆化にある。無碍思想でもある。

すなわち、穢土浄國も本来一心にあるので、不覺の凡夫も「南無阿弥陀仏」を叫んで阿弥陀経をかかげれば極楽世界に行くことができ誰でも成仏できるのである。したがって凡夫も往生できるという彼の來世思想と仏教の大衆化はいわば浄土信仰として新羅仏教の独自の境地を開拓した。

元暁の無碍思想は、彼の私生活でもよくあらわれている。彼はどこでもひっかかる所のない徹底した自由人であった。“一切に引っかかるところのない人は一度生死を抜ける(一切無導人 一道出生死)”といった彼の言葉を見ても彼の無碍思想は執着する。彼は仏と重生を二つと見なかったし、むしろ“おおよそ重生の心をもとにし、引っかかる場所がないので、泰然とすることが虚空のようであり、黙っていることがむしろ海のようなので平等で差別相がない。”と言った。それゆえに彼は徹底した自由が衆生心に内在していると見たし、自らも徹底した自由人になりうるとすれば、いかなる宗派にも傾かず、より高い次元から一勝と一心を主張したのである。これ以外にも元暁は如来像思想など、仏教のすべての思想に対しても独自の思想体系を確立した。

VIII 天一国の時代

1. 天一国の宣布とその背景

「神の国は真の自由と信仰と理想が結実したところであり、真の愛と真の生命と真の血統が定着した真の家庭が位置をしめる所である。さらに永遠の真の愛と幸福が充満した千年王国時代が始まるのである。

神の国は神を中心に天と地、すなわち無形世界と有形世界の全体を領土と見なすのである。

神のもとに一つの宇宙として天の父母を中心とした地球星、大家族主義世界がなされる時である。

神の国は愛によってなされた世界である。」—真の父母のみ言葉

天一国の国民

- 1) 人間としてこの地に来て神を中心に生きていた数多くの霊人たち
- 2) 現世に神を中心に生きている人たち。

3) 後代に生まれる数多くの後孫たち

(『天一国憲法』－神の平和理想世界の実現のための教会法－

第2条 天一国国民、第19条 天一国国民によると、「1. 天一国国民は神と真の父母に侍り、真の父母の教えに従うものとする。2. 天一国国民の要件に関する事項は法律で定める。」となっている。(2014. 5. 2)

2001年1月13日、すべての蕩滅条件が勝利された結果、第4次アダム血統圏還元式をなしたために神様王権即位式が行われた。

2003年2月6日、「宇宙天地父母様天一国開門祝福成婚式」を行うことによって初めて天一国家庭に真の父母が王の位置に即位できた。

「宇宙天地真の父母様平和統一祝福家庭王即位式」を行ったためにこの地上に初めて天一国が始まった。

2. 天一国の構造

1) 国家の三つの要素は国民、国土、主権である。

天一国では主権と領土と国民が必要である。

主権復帰－神様王権即位式

国土復帰－神様祖国定着大会

国民復帰－天一国国民として入籍し、天一国国民証をもっていなければならない。

天一国国民証がなければ天の国に入ることができない。

天一国の旅券はビザが必要でない。

天一国国民は天地を代身した国民である。

(『天一国憲法』－神の平和理想世界の実現のための教会法－

第16条、天一国の公式言語は神の祖国語である韓国語とする。

第17条、天一国の国旗は天一国旗、国歌は天一国歌とし、国鳥は鶴、国花は薔薇と百合とする。

第18条、天一国の世界本部は神の祖国であり本郷である大韓民国の天正宮に置く。)

(2014. 5. 2)

2) 天一国の基本経典と「天一国憲法」の公式頒布

世界平和統一家庭連合(家庭連合とする)が2014年2月12日、天一国の三大経典の編集を完結し、天一国憲法を頒布することによって天一国の定着のための本格的な前進をするようになった。

家庭連合は地球村平和世界の実現のために超宗教超教派運動、中東平和運動、国際平和高速道路建設の推進、人種を超越した国際祝福結婚式などの事業も展開し、これらをもとに2013年2月、「神の国」が地上から始まったことを知らせる天一国基元節を宣布していた。

この日の記念行事では記念式、20,000 双の宇宙祝福式、慶祝公演などの順序で進められた。記念式では天一国の経典である『真の父母経』が天一国経典編纂委員会の金栄輝委員長と李載錫副委員長が『天聖經』と『平和経』に続いて天一国の経典の中で最後に編纂された経典であり、この日に奉呈されたし、さらに崔妍娥世界平和女性連合副会長と文薫淑ユニバーサル文化財団の理事長が「天の法度」である『天一国憲法』が真のご父母様に奉呈され、真のご父母様はこれを人類と宇宙の前に頒布され歴史的な意味を加えた。

三大経典が文鮮明・韓鶴子総裁のみ言葉の集大成であれば、憲法は三大経典として実践しなければならない核心的な内容を含めたのである。

次に韓総裁は天一国最高委員会委員12人の名簿（金栄輝、李載錫、金孝南、崔妍娥、文薫淑、柳慶錫、金振春、宋龍天、小山田秀生、金ギフン、トーマス・ウォルシ、ポニー・ジョンソン）を発表した。最高委員は天一国の最高議決機関として韓総裁が有故の時、韓総裁を代行する莫大な権限までも持つようになる。

天一国憲法の必要性

天の国に憲法が必要であり法が必要である。今後は復帰摂理によって完成するのでなく法を守ることによって完成する。

天の国があれば天の国の憲法が現れなければならない。憲法が現れて国家形態を供えれば主権がなければならない。次は国土と国民である。

天の国を法理によって治めることのできる憲法を地上で作らなければならない。

一つの憲法を中心に新しい生活体制、新しい社会体制、新しい人生の営為の体制を供えるようになりそこから初めて天国生活が始まるのである。

天の国の憲法を中心に一つの統治的な地上天国が完成されなければならない。

天の国の憲法は個人の生活を完全に維持させることができ、家庭と国家と社会が侵害されず完全に行くことのできる内容を決定するものとして作らなければならない。

天の憲法の第一は、神を自らの身体以上に愛せよというものであり、その次は神が愛する兄弟たちを自らの身体以上に愛せよというのである。

これからは天の国の憲法を中心に法による法理時代が来ました。

天国は法を中心に完成するようになります。人の法ではなく天の法を立てなければならない。人権でなく天権を立てようとするのである。

2001年の神様王権即位式とともに宣布された憲法の第1条として、「…するな」と言

って3項目、①血統を汚すな、②人権を蹂躪するな、③公金を横領するなという内容、「…せよ」というものとして3項目、①父子統一、②夫婦統一、③子女、兄弟統一という内容も「天一国憲法」に含まなければならない内容である。

天一国憲法の制定のための公聴会が天一国元年、天暦6月5日《陽暦7月12日》、忠南牙山にある鮮文大学校で全国の牧会者及び公職者300数人が参加したなかで行われた。

金孝律共同運営委員長は経過報告及び天一国憲法制定の意義を説明し、梁昌植共同運営委員長が天一国憲法に対する報告をした。

金孝律委員長は「(天一国憲法は) 真のご父母様のみ言葉と『天聖經』の内容を基準に作成しなければならない天の法であるため世論を収斂し反映して憲法の全文を完成しなければならない」と述べ、「あわてずに多くの時間を投入して諮問と研究を通して完成されるだろう。」と強調した。

天一国憲法は、全体11章、13個の主題、76個の条項からなっており、憲法の総綱1条には神、真の父母、天一国の述語の概念および定義、2章には、天一国国民の権利と義務、3章から11章までは天一国憲法の運営体制で構成される。

そして天一国元年、天暦7月17日(陽暦8月23日)に行われた「文鮮明天地人真の父母様天宙聖和1周年追慕式」において、金栄輝經典編纂委員会委員長と金孝律氏が代表して真のご父母様に形式上の『天一国憲法』を奉呈した。

2005年10月20日、ウクライナで人類の福祉と未来のために平和王国警察と平和王国軍の創設を全世界の前に宣布した。

神の恨みというのは、4代を教えることのできる教本をつかって人類を教育できなかったのである。①天の子女の教本、②天の兄弟の教本、③天の夫婦の教本、④天の父母の教本などであった。

「人生に6,7回も生死を超える獄苦をへながら、勝利して準備した遺言書です。永遠の人類の教材—教本として8つの本を残します。巻数から言えば、千巻を超える分量です。」と言って真のお父様は次の八大教本を残されました。

- ・『文鮮明先生み言葉選集』
- ・『原理講論』
- ・『天聖經』
- ・『家庭盟誓』
- ・『平和神経』
- ・『天国を開く門 真の家庭』
- ・『平和の主人 血統の主人』
- ・『世界經典』

これらの教本は、皆さん方が霊界に行っても読み学ばなければならない本です。決し

て人類の頭脳から出た言葉とか教えではありません。天が不幸な人類を救援するために下さった天の造化を教える教材、教本だからです。

ところが今回、真のお母様の指示に従って金栄輝経典編纂委員会委員長を中心に『天聖經』増補版、『平和経』、『真の父母経』が出版された。三大経典は人類の霊性を導く家庭連合の教材、教本として後代の道が伝えられるようになった。

・『天聖經』増補版

神の編から平和メッセージの編まで総 13 編、付録の真の父母の祈祷編と大分類、「すべてなされたと宣布された真のお父様の最後の祈祷から 2000 年以降のみ言葉の増補。

天一国のビジョンと基元節以降、我々の責任に対する真のお父様のみ言葉を収録。

・『平和経』

人類の救援と平和世界実現の道を提示した人類の教材教本。

『平和神経』『天国を開く門 真の家庭』など、8 大教材教本の重要なみ言葉を収めた。

節理史を変化させた大衆集会と世界を巡回しながらみ言葉をなされた公開の講演文を収録した。

・『真の父母経』

真の父母の血と汗と涙の生と行跡をみ言葉によって綴られた感動の大叙事詩、天の真の父母の解放と天一国の建設のために献身された生き生きとした戦勝報告書、真の父母の誕生と希望、各種の活動などを 13 個の編として一目瞭現に整理した。

・『天一国憲法』

『天一国憲法』—神の平和理想世界の実現のための教会法—

天の国の憲法の必要性

- ・ 神様王権即位式を行ったので、
- ・ 天一国を宣布したので、
- ・ 理想的な体制のために
- ・ 天国の統治と定着のために

天一国憲法の制定の原則は

1. 神と真の父母の天一国理想を地上で実現。
2. 真の父母のみ言葉を中心に制定
3. 実体的な天一国を定着・完成させる案内の役割。
4. 天一国国民の信仰の確立とビジョンの提示。

5. vision2020 の成功牽引。
6. 超民族、超国家、超人種、超宗教的な普遍性。
7. 性別・年齢・身分・所有・人種の平等
8. 満場一致制の指向
9. 上向式、無給奉仕制の採択

天一国と天一国憲法の構造

全文

家庭盟誓

天一国 総綱 第1章 ・第1節 神、・第2節 真の父母、・第3節 天一国

天一国 国民 第2章 ・真の父母の家庭 ・祝福家庭

天一国 体系 第3章 ・天一国最高委員会

第4章 ・天政苑

第5章 ・天議苑

第6章 ・天法苑

第7章 ・天財苑

第8章 ・天公苑

第9章 ・地域単位 教会自治

・大陸教会自治

・国家教会自治

第10章 ・選挙

第11章 ・憲法改正

附則

2014.5. 2

<真のご父母様が決定された8大教本を変更したことに対する批判>

8大教本を変更したことに対する批判に対して金栄輝委員長は真のお父様と真のお母様にどのような価値的な差異があるのかに対して次のように述べている。

「われわれが誤って理解することは、非常に高い位置にいて、真のお母様はそのように高い位置にいないとみているのです。これが問題の発端です。8大教材を巻数のみから考える観点と真のお父様の位相と真のお母様の位相を異なってみる観点から出たも

のです。

真のお父様の価値—真のお父様が個人的になされたみ言葉は一つもありません。すべてが「真のご父母様」という名をかかげてされました。すべてのみ言葉は真の父母の立場からなされたというのです。お祈りも真の父母の名によってなされました。どのような意味かという、真のお父様が一人でされたことでなく、真のお父様は常に真のお父様と真のお母様が一つになった真の父母を代表してみ言葉をなされたのです。

新婦であるお母様を探し求めて成婚式をされることによって、その時から真の父母の名をもつようになったし、聖酒式もするようになったし、祝福記念式もするようになりました。その時から新しい摂理が始まったのです。真のお父様がその次の摂理になりえたのは真のお母様を探し求めて真のお母様と一つになったからです。真のお父様の価値と真のお母様の価値がプラスになって真の父母となって次の摂理をなされたのです。」

「神様から呼ぶとき真のお母様がいかなることをなされる時も真のお母様一人でなされるのでなく、真のお父様も霊的に一つになって共にされているという心をもってそのような条件でなされるのです。真のお父様の価値は真のお母様と同じです。」

「増補版『天聖經』はすべて真のお父様のみ言葉です。615巻以上になる真のお父様のみ言葉を1巻の本に作ろうとすれば取捨選択せざるをえないために編纂委員会では正確な基準と客観的な観点から取捨選択をしたのです。最も正確だというものを選んで挿入したのです。」と金栄輝委員長が述べられた。

3) 入籍時代

入籍時代の内容を整理すれば次の通りである。

出生申告をすることが入籍である。

戸籍整理—天の国の戸籍に再び入籍しなければならない。

サタン世界の戸籍はすべて滅びる。

天国は自らの実績にしたがって行く所です。

今後は世界が12支派を中心に入籍しなければならない。

国があつてこそ入籍がなされる。出生申告・結婚申告・死亡申告をするのです。

氏族メシアの責任をはたせば国に入籍される。

天一国は神の国である。神の国は不変であり絶対的である。

自由と平和と幸福の天一国の定着でなく安着である。

天一国は主体国開放時代であり、その次は圓一統一時代である。

神が本来の中心である主体国勝利圏開放時代である。

天一国、その次は自主国勝利圏開放の世界、その次は圓一統一世界である。

天一国は二人が一つになる国であるが、その次は3代を中心に圓一国になる。

その次は統一世界、統一の国が出るようになる。

天父主義と平和の王権時代が到来する天一国が国の名前となり一つの国にならなけ

ればならない。

3. 天一国国民の姿勢

1) 家庭盟誓

家庭盟誓は1994年5月1日、世界平和統一家庭連合の創設とともに天が人類に与えられた祝福の中の祝福である。

家庭盟誓はすべての原理の内容を中心に家庭の編成にかなった核心的な内容は抜粋して記録したのである。

家庭盟誓は成約時代を超えて宇宙平和統一王国をなす絶対基準であり、憲法とも同じものである。

真の家庭をなすことが天一国の市民権を獲得する近道になる。

家庭盟誓は真の父母の戦勝記録である。侍義時代である成約時代の教えを与える法度である。神を占領する真の愛の核爆弾である。天国門を開けるカギである。教えてくれる教訓は宇宙主義である。

天一国の主人はわが祝福家庭である。祝福家庭が次の八つの項目を天の父母（神）と真の父母に盟誓するのである。

天一国主人であるわれわれの家庭は真の愛を中心に

- (1) 本郷の地を求め本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建することをお誓いします。(万物復帰)
- (2) 天の父母様と真の父母様に侍り宇宙の代表的な家庭になり中心的な家庭となって家庭では孝行者、国家では忠臣、世界では聖人、宇宙では聖者の家庭の道理を完成することをお誓いします。
- (3) 四大心情圏と王権と皇族権を完成することをお誓いします。
- (4) 真のご父母様の創造理想である宇宙大家族を形成し、自由と平和と統一と幸福の世界を完成することをお誓いします。
- (5) 毎日主体的な天上世界と対象的な地上世界の統一に向かって前進的な発展を促進化することをお誓いします。
- (6) 天のご父母様と真のご父母様の代身家庭として天運を動かす家庭になって天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成することをお誓いします。
- (7) 本然の血統と連結され、ためにする生活を通して心情文化世界を完成することをお誓いします。
- (8) 天一国時代を迎え絶対信仰・絶対愛・絶対服従によって神・人・愛の一体理想を為して、地上天国と天上天国の解放圏と釈放圏を完成することをお誓い

します。

2) 天一国国民の基本義務と使命

4、共生・共栄・共義主義社会

1) 共生主義－経済的側面

2) 共栄主義－政治的側面

3) 共義主義－倫理的側面

IX 統一思想（神主義、頭翼思想）

1、永遠なる神の愛の理想世界を実現しようとする神の思想

統一思想は文鮮明先生の思想であり、統一運動の理念であるが、神主義または頭翼思想とも呼ばれている。神主義とは、神の真理と愛を核心とする思想という意味であり、頭翼思想とは、右翼でもなく左翼でもなく、より高い次元において両者を包容する思想という意味である。神の愛を中心とした新しい価値観による愛の精神をもって、左の思想である共産主義からは、憎悪心、闘争心や物質主義を取り除き、右の思想である民主主義からは、利己主義、自己中心主義を取り除いて、対立する両者を和解せしめ、共同して、神と人類の宿願である理想世界の実現に向かって進むように導いてゆくための思想が、神主義であり、頭翼思想であり、統一思想である。人類のあらゆる難問題を根本的に解決することによって、永遠なる神の愛の理想世界を実現しようとする神の思想である。したがって、いかなる難問題であっても統一思想（神主義）を適用すればたやすくかつ根本的に解決されうるのである。

さらにまた、統一思想は、人類の親であり、すべての宗教を設立された最高の中心である神の、真なる愛によって、対立する諸民族や諸宗教を和解せしめて、人類一家族の理念を実施すると同時に、人類のあらゆる難問題を根本的に解決することによって、永遠なる神の愛の理想世界を実現しようとする神の思想である。したがって、いかなる難問題であっても統一思想（神主義）を適用すれば、たやすくかつ根本的に解決されうる。

人間が神を排除して自分の力で問題を解決しようとしたのもまた宗教が現実問題を

指導できず互いに対立しているのも、人間と宇宙の創造主である神がいかなるお方であるのか正確にわからなかったからである。そこで、神を正確に理解することによって、人間と世界の問題を解決しなければならないという結論になるのである。文鮮明先生はまさにそのような立場から、真なる世界、善なる世界を建設しようとして、神の啓示に基づいて統一思想を提示されたのである。

統一思想について文先生は次のように語られている。

神の真理は一定の摂理的人物を通じて地上に伝達されます。神の真理は絶対真理であります。絶対真理は万能のキー（鍵）のようなものであって、この真理を適用すればいかなる難問題をも説くことができるのであります。私はかつて長いお祈りと瞑想の生活において、ついに実行する神に出会い、この絶対真理を授かりました。それは全宇宙と人生と歴史の背後に隠されたすべての秘密を明かした驚くべき内容でありました。この内容を社会に適用すれば、社会問題が解かれ、これを世界に適用すれば、世界問題が解けるのでした。のみならず、宗教の未解決の問題、哲学の未解決の問題も解けるのでした。特にこれを共産主義理論の批判に適用した時、共産主義のすべての虚構性が白日の下に暴露されると同時に、共産主義に対する代案も立てられるのでした。これはかつてなかった新しい人生観、世界観であり、新しい摂理観、歴史観でありました。この真理はまたすべての宗教教理や哲学の特性を生かしながら、全体を一つに包容し得る統合原理でもあったのです。私はこの思想を統一思想または神主義と名付けました。

（1985年12月16日「国際勝共安保決議大会」での演説文より）

今日まで、宗教や思想はみな平和な世界、善の世界を実現しようとしてきたが、人間と世界の理想像が漠然としていたために、それを実現することはできず、かえって互いに対立してきたのであった。そこで統一思想は、神を正確に理解することによって、人間と世界の本来の姿を具体的に明確に示そうとするのである。それによって従来 of 諸宗教や諸思想の共通性を明らかにし、宗教の統一と思想の統一を可能ならしめるのである。

自由主義社会 — 伝統的な宗教的価値観の崩壊が著しい
共産主義社会 — プロレタリア階級を基準とする価値観
(社会主義社会) 党に対する献身、服従などの価値観が崩壊
世界的に価値観の総崩壊現象を見せている。

統一思想は、神の絶対的愛に基づいた永遠不変なる価値すなわち絶対的価値をもって、崩壊しつつある伝統的な価値観を蘇生せしめ、統一せしめようとするのである。

そして、すべての宗教や思想が願ってきた平和な世界、善なる世界を地上に実現しようとするのが統一思想なのである。

2. 統一思想と思想統一

1) 統一思想の体系化の根拠

統一思想は文鮮明先生思想であって統一主義とも称する。統一思想の各部門の理論は文鮮明先生思想を体系化したのである。

統一原理の中の思想的 content をもった文章ないし句節は全部思想化の根拠とする。(例、創造原理全部、復帰原理のほとんど全部、墮落論、終末論、メシヤ降臨論、復活論、キリスト論などの各々一部)

み言葉 — 説教集、み言葉集、その他のみ言葉の中から、必要な部分は可能な限り最大限収集して、体系化の根拠とする。

2) 統一思想の目標

一切の既存思想の統一を期する。

従来すべての思想の主眼点はみな、統一思想で扱ったものであることを明かす。

従来学者たちが問題を扱ってはいるが、根本的な解決をしないまま残したものを、根本的に一貫性のある解決をして、思想統一を成し遂げる。

歴史の発展に従って発展してきた多くの思想は、地上で出発して天上の思想に向かい、上昇運動をしながら段階的に高められてきたのであるが、その上昇運動の目標である天上の思想としての統一性と絶対性を備える。統一原理の目標を達成しようとする実践方案である。

すべての宗教の教理の神髄は、統一原理の一部であることを明かすと同時に、すべての宗教の目標が一致しており、各宗教が一つの絶対者に由来するものであることを明かして、宗教統一を達成する。

絶対的価値観を提示して、すべての宗教の価値観を統一の方向に再定立する。

古い歴史に終止符を打ち、新しい歴史を出発させるために、新文化の創建の思想的基盤を提示する。

統一原理を実生活に生かす実践方案を提示する。

3) 統一思想成立の起点と思想の秩序的転回

統一思想の成立の起点は絶対者であり、創造主なる「神」である。

その理由は、創造された自然と人間の諸問題は、その創造の基準を知らずしては解決が不可能だからである。

個人、家庭、社会、世界、歴史、宗教、政治、経済などにおける、数多くの問題の発生の根本原因は、世界と人間が非原理的な姿になったことである。

したがって、一切の問題の根本的な解決は、原理の本体なる神の真の姿と、創造の真

の内容を正しく理解することである。

ゆえに、統一思想は神の属性を詳細に扱う原相論から出発する。

統一思想も、思想展開において、あらゆる部門を扱うことになる。

その思想展開は創造すなわち、L o g o s (み言葉)の展開の順序に従うようになる。

第1、原相論、第2、存在論、第3、本性論、第4、認識論、第5、論理学、
第6、価値論、第7、教育論、第8、倫理学、第9、芸術論、第10、歴史論、
第11、方法論

X. 結論

<参考文献>

金富軾、『三国史記』

一然、『三国遺事』

統一思想研究院 編、『新版 統一思想要綱(頭翼思想)』(ソウル:成和出版社、1993)。

李相憲、『統一思想概要』(統一思想研究院編、東京:光言社、1988)。

李相憲、『統一思想教材』(東京:統一思想研究院、1984)

李基白、李基東、『韓国史講座』I <古代編> (ソウル:一潮閣、1982)。

国史編纂委員会編、『韓国史』2 民族の成長、3 民族の統一 (ソウル:探究堂、1978)。

劉明鐘、『韓国思想史』(大邱:以文出版社、1981)。

『韓国哲学史』(ソウル:日新社、1982)。

金東華、『韓国歴代高僧傳』(ソウル:三星美術文化財団、1973)。

韓国思想全集、『韓国の仏教思想』(ソウル:三省出版社、1981)。

邊太燮、『新体系解説 韓国史要論』<改訂版> (ソウル:三英社、1977)。

李元淳、鄭在貞、徐毅植、(訳; 君島和彦その他2人)「若者に伝えたい韓国の歴史」—
共同の歴史認識に向けて— (東京:明石書店、2004)。

高麗大学校韓国史研究所 編、『韓国史』(ソウル:セムンサ、2014)。

鎌田茂雄、『朝鮮仏教史』東洋叢書① (東京; 東京大学出版社、1987)。

『韓国古寺巡礼』新羅編 (東京:日本放送出版協会、1991)。